

トルコにおける都市研究と労働社会史研究 Urban Studies and Labour History Studies in Turkey

岩田 和馬

IWATA KAZUMA

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies, master's student

Quadrante, No.19, (2017), pp.177-187.

目次

はじめに

1. トルコにおける都市研究

1-1. ゲジェコンドゥ研究

2. 社会関係

2-1. 労働者階級の経験と平均化

2-2. 労働者階級と「階級意識」の形成

3. トルコにおける労働社会史研究

4. ゲジェコンドゥ研究と労働

4-1. ゲジェコンドゥの独自性

おわりに

はじめに

都市は、それぞれに独自の経緯を辿って発展を遂げてきた。発展が進むにつれて、都市は様々な社会問題を内包していくようになる。これらの「都市問題」はそれぞれの都市の歩んできた歴史の上に発生するものである。都市の歴史は、すなわち都市の独自性と言い換えることも可能であるだろう。このような独自性を持つそれぞれの都市のあり方は、政府による統制といったものだけではなく、その都市に居住する人々の生活や労働のあり方を強く反映するものである。

H. ルフェーヴルや D. ハーヴェイが述べているように、労働者の生産と再生産から都市が形成されていると考えれば¹、この「生産と再生産」こ

そが都市の独自性の源泉であると言えるだろう。その上で都市について考察する時、都市を単なる「入れ物」として捉えるのではなく、都市住人の労働や生活における関係の総体として捉えることがより妥当であると考えられる。それゆえ都市労働者の社会関係の分析は、独自性を持つ都市の内実を研究するための一つの重要な指標となるだろう。都市の中で労働者が歩んできた歴史や社会関係の分析は、都市の内部構造の一端を明らかにする。これらの実証的な分析を通して、都市の具体的な形成過程、現在抱えている問題、その問題が都市住民に与えている影響が外部からの認識によるものではなく、都市住民の目線から明らかになる。

本稿ではトルコ共和国の古都イスタンブルに関する都市研究に着目する。はじめに、これらの都市研究の現状に言及し、後半において労働社会史の観点からイスタンブルを捉えなおす可能性を探る。1 でトルコの都市研究に置ける先行研究に言及したのち、2 と 3 では「労働者」に着眼するために、まず、トルコの労働社会史を『イングランド労働者階級の形成』における E. P. トムソンの研究を主に参考にしながら検討する。4 ではトルコにおける研究の現状を検討し、特にゲジェコンドゥと呼ばれる不法占拠住宅の研究について述べ、労働社会史の視点を取り入れる可能性について言

¹ Lefebvre, Henri, [1968] 1972, *Le Droit à la ville; suivi de, Espace et politique*, Anthropos, Paris (=2011, 森田和夫訳『都市への権利』筑摩書房); Harvey, David, 2013, *Rebel*

Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution, Verso, London (=2013, 森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井大輔訳『反乱する都市: 資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』作品社)。



及する。

1. トルコにおける都市研究

伝統的にトルコの都市研究は、統計的な数字や空間構造の分析を中心に扱うものが多く、労働やそれに付随する社会関係が中心的に扱われることは少なかった。多くの研究は社会学や経済学などの観点から、主に人口動態や都市開発事業などを主な分析対象としている²。80年代後半になりトルコが世界経済の中に組み込まれていくにつれ、新自由主義やグローバリゼーションといった世界的な情勢を通してイスタンブールなどの都市を把握する研究が行われるようになった。このような研究は、イスタンブールという巨大都市を世界経済の中でどう位置づけるか、といった視点のもとで行われてきた。それらの代表的なものとして、Ç. ケイデルらによる国際経済市場におけるイスタンブールの位置づけを分析した研究³などがある。しかしこれらの研究の多くは、欧米の都市の観察を基に形成された理論に即してイスタンブールの研究を行っており、イスタンブールにおける独自性や特殊性を取り上げきれていない。近年注目されるようになった、インナーシティへ対するジェントリフィケーションを取り扱った研究も同様の問題を払拭できていないと言って良いだろう⁴。同時に、イスタンブールそのものや、そこに居住する人々がどう認識され、表象されるか、といったような問題を取り上げた研究も数多く存在する。このような研究は都市の「表象」や「記憶」といったテーマを中心に取り扱いながら、都市や特定の地区の独自性をある程度視野に入れていたものの、史料を用いて実際の社会構造を実証的に分析することは少ない。これらの研究はいずれも、統計や理論を

多分に利用する一方で、史料を基にした都市に存在する都市住民の社会関係の実証的な分析は行ってこなかった。

一方で、C. ベハールのもののように、都市の一つの街区（マハーレ）に着目して史料の緻密な分析の上で社会構造の復元とその歴史の変遷を追う都市研究も少数ながら存在する⁵。ベハールは、ムフタールと呼ばれる街区長の残した史料群を基にイスタンブールのカサップ・イリヤス地区の前近代における発展を明らかにした。これらの史料からは、ワクフによる土地の貸し出しや住民の係争の具体的な事例を通して街区の空間構造や社会構造を垣間見ることができる。ベハールは史料の分析から、街区における権力構造の中心がイマームから世俗的権力であるムフタールへ移行する過程や、街区における住人たちの出身地を基盤にした結びつき、この結びつきにより規定される街区やギルドにおける社会関係などを明らかにした。また、政府の強い規制にもかかわらず、イスタンブールへの人口流入が続き、移住者たちが地縁や血縁などを利用してそれぞれの街区の中へ都市下層として取り込まれていった事実は、前近代イスタンブールにおける自生的な社会集団とその発展形態の一端を表していると言える。ベハールの研究は、史料の分析の上で地区における集団間の社会関係や権力との関係を明らかにしながら、地区の成立とその内実を明らかにし、そこからオスマン帝国の歴史にアプローチをするという手法の可能性を示していると言えるだろう。

1-1. ゲジェコンドゥ研究

トルコにおける現代都市研究の中心的な課題となってきたテーマの一つがゲジェコンドゥである。1940年代後半からトルコにおける農村人口が流動化すると都市への人口流入が増大し、移住者たちの多くは工場労働者や日雇い労働者として都市に包摂された。イスタンブールにおいても大規模な人口の流入が起り、移住者たちの中にはタルラバシなどのオスマン帝国時代から残る古い地区に吸収されるものもいたが、廃材などを利用して都

² 例えば、R.ケレシユ・加納弘勝（1990）『トルコの都市と社会意識』アジア経済研究所、Şenyapılı, Tansı, 1978, *Bütünleşmemiş Kentli Nüfus Sorunu*, Ankara: Orta Doğu Teknik Üniversitesi などが代表的なものとしてあげられる。

³ Keyder, Çağlar, 1999, "The Housing Market from Informal and Global" in Keyder, Çağlar eds., *Istanbul*, Maryland: Rowman & Littlefield Publishers, pp.143-159.

⁴ Aslan, Şükrü and Tahire Erman, 2014, "The Transformation of the Urban Periphery: Once Upon a Time There Were Gecekondu in Istanbul" in Koçak, D. Özhan and Koçak, O. Kemal eds., *Whose City Is That?*, Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, pp.95-113 etc..

⁵ Behar, Cem, 2003, *A Neighbourhood in Ottoman Istanbul: Fruits Venders and Civil Servants in Kasap Ilyas Mahalle*, Albany: State University of New York Press. (以下 ANOI.)

市周縁の空き地に手製のバラック小屋を建設し居住するものが多数現れた⁶。不法占拠住宅の形成は、オスマン帝国時代後期から共和国初期にも確認されていたが⁷、1940年代からの流入する人口と不法占拠住宅の急激な増大により、「ゲジェコンドゥ（一夜建て）」という呼称が利用されるようになり都市問題として認識されるようになっていった。

1950年頃からイスタンブルやアンカラなどの大都市を中心に形成が始まったゲジェコンドゥは、流入する人口に対して整備の追いつかない正規市場の住宅に代わって都市に流入する人口を吸収する役割を果たしてきた。上下水や電気、道路などの整備を欠いたゲジェコンドゥは、政府から社会問題として認識され80年代中盤から徐々に再開発の対象とされていった。2002年に公正発展党が政権を握り、住宅開発局の権限が強化されるとその流れは大きく強められ、現在もゲジェコンドゥに対する再開発が続いている。再開発されたゲジェコンドゥは、跡地が中-高所得者層向けの団地や商業施設へと姿を変えていき、2000年代中盤から「ジェントリフィケーション」という視点からの都市研究がトルコにおいても行われるようになった。

初期のゲジェコンドゥ研究における最も重要な研究の一つとしてK. H. カルパットによるゲジェコンドゥ研究が挙げられるだろう⁸。ゲジェコンドゥが拡大しつつある70年代にカルパットは、ゲジェコンドゥ問題を移住の動態と農村と都市のゲジェコンドゥの関係に着眼しながら研究を行った。同時代的に発生している問題をゲジェコンドゥ住民へのインタビューや政府の刊行した統計資料などを用いながら分析したこの研究は、世界で進む都市化に伴うスラム化の流れの中にゲジェコンドゥを位置づけ、農村からゲジェコンドゥへ移住した人々のインタビューを通して、イスタンブルに形成されたゲジェコンドゥと農村の関わりを明らかにしている。現在もカルパットの研究はゲジェコンドゥ研究における基礎的な文献であり、その

後のゲジェコンドゥ研究の枠組みの一つを規定していると言えるだろう。

T. シェンヤプルの研究のような統計的数字に着目した分析手法もまた、ゲジェコンドゥ研究の特徴の一つと言える。これらの研究は、経済学や地理学などの観点から、統計的な人口動態や都市の空間構造の分析を行うことで、ゲジェコンドゥなどの都市が抱える問題を明らかにしている。このような研究において、ゲジェコンドゥは一つの「現象」として捉えられ⁹、政府によって決定された経済政策や国際経済の影響による農村人口の流動化の結果として発生したものとして扱われている。

近年では、住宅開発局によるゲジェコンドゥの再開発と、ゲジェコンドゥ住民の郊外への移住が進むにつれ「都市への権利」などをキーワードとしてジェントリフィケーションの問題を取り扱う研究が見られるようになってきている。その中にはT. エルマンやN. サクズオールなどのように社会的な観点から再開発政策と被再開発地区における権力の非対称性や社会的スティグマの問題に着目した研究¹⁰や、T. イスラムのような地理学的な観点からN. スミスのジェントリフィケーションの枠組みをイスタンブルに適用することを試みる研究¹¹が存在する。

これら多くのゲジェコンドゥ研究は、数字や理論を通してゲジェコンドゥ一般を包括的に一つの現象として分析し、同じ枠組みで捉えられた他国の都市との比較などを行っている。しかしながら、成立時期も過程も異なる各ゲジェコンドゥを数字

⁶ Şenyapılı, Tansı, 2004, “Baraka”dan Gecekonduya: Ankara’da Kentsel Mekanın Dönüşüm 1923-1960, İstanbul: İletişim. (以下BG.)

⁷ ANOI., BG.

⁸ Karpat, H. Kemal, 1976, *Gecekondu*, New York: Cambridge University Press.

⁹ BG. Akbulut, Mehmet Rifat and Seher Başlık, 2011, “Transformation of Perception of the Gecekondu Phenomenon” *METU Journal of the Faculty of Architecture*, Vol.4, No.2: pp.1-44 などでは、ゲジェコンドゥは「現象」を意味する「Olgu」「Phenomenon」といった言葉で表されている。

¹⁰ Erman, Tahire, 1997, “Squatter (gecekondu) Housing versus Apartment Housing: Turkish Ruralto-Urban Migrant Residents’ Perspectives” in *HABITAT INTL*. Vol.28, No.1, pp.91-106, London: Elsevier.; Sakızlıoğlu, Bahar. and J. Uitermark (2014) “The symbolic politics of gentrification. The restructuring of stigmatized neighborhoods in Amsterdam and Istanbul” in *Environment and Planning A* 46(6), pp.1369-1385, New York: SAGE.

¹¹ Islam, Tolga, 2005, “Outside the core: gentrification in Istanbul” in Atkinson, Rowland and Gary Bridge eds, *Gentrification in Global Context*, London: Routledge, pp.123-138.

や理論により一般化することは、それぞれのゲジェコンドゥの特殊性を覆い隠してしまう。ゲジェコンドゥはその形成された時代や地域により大きくその性格を変える。住民構成もまた、ゲジェコンドゥにより民族的、宗教的、社会階層的に異なる性格を持つ。これらの各ゲジェコンドゥが持つ性格はそれぞれの形成の歴史的過程を反映しており、決して数字や「現象」という一般化された言葉で捉えきれものではない。

ゲジェコンドゥの独自性に注目するためには、統計的な数字や理論ではなく、それぞれのゲジェコンドゥが持つ社会構造を明らかにする必要があるだろう。社会の内部構造を理解する要素として、カルパットが注目した移民の動態などがあげられるが、イスタンブルの下層社会から都市を捉えるとき、労働の形態もまた一つの大きな要素となりうるだろう。本稿では、ゲジェコンドゥの内部構造を理解する上で、労働関係、地縁・民族・宗教的繋がり、土地所有形態に注目する必要があると考える。労働を媒介とした社会関係の把握に関して、イギリス産業革命期の労働社会内外の社会関係から労働者階級の形成を分析したトムスンの手法は、ゲジェコンドゥの形成を明らかにする上で大きな示唆を示しているといえる。次節からは、『イングランド労働者階級の形成』におけるトムスンの論点に触れ、トルコにおける労働社会史研究の推移とトムスンの枠組みをトルコの労働社会史研究へ適用する可能性について述べる。

2. 社会関係

『イングランド労働者階級の形成』においてトムスは、労働者階級と階級意識の形成を分析するために労働者諸集団と資本家などの間に存在した生産関係や、農業労働者と地主の関係やその変化に注目した。本書の冒頭において「階級は人間関係に実際に生じるなにか」¹²であると述べるトムスは、階級は突然現れるものではなく、それぞれの集団が内外における関係を通じて形作るものであると説明する。トムスは、産業革命

が労働者に影響を与えたのは、蒸気機関のような技術革新よりも工場制の確立といった資本家と労働者との間の生産関係の変化であったとし、これこそが諸労働者の社会的地位を劇的に下落させ、生活環境を悪化させた原因であると論ずる。

ここで述べられる具体的な生産関係の変化とは、賃金の切り下げや労働時間の引き延ばしといった資本家による搾取の強化や、アイルランド合同法や囲い込みによる大都市への不熟練労働者の流入、自由主義思想による徒弟制度の解体などを指す。従来、産業革命時代の機械の導入によって労働者が資本家に従属されるようになったと考えられていたが、トムスは資料の分析を基に機械の大量導入以前からすでに労働者の生活状況が悪化していたことを指摘した。そして、これらの労働者の残した手記や H. メイヒューといった当時の労働者や都市下層階級とされた人々への観察を用いつつ、労働者たちの生活レベルでの産業革命の経験や、社会関係の変化によって生活環境が悪化したことを労働者が正確に理解していたことを明らかにした。

都市における熟練労働者や織布工といった多様な労働者の意識の形成過程と並行して、トムスは、囲い込み期における農業労働者と地主の関係にも注目している。農民たちは、囲い込みに対して様々な形で反乱を起こしたものの、やがて農業労働者として地主に従属させられていった。トムスは、W. コベットなどの発言などを引いて地主に従属された農業労働者たちの不満が都市労働者の不満と共通性を持つようになっていったとし、その後のチャーチスト運動といった労働者階級による社会運動の基盤を形成したとしている。

この時期の労働者と資本家や地主の間の変化を把握する上で重要な概念として、のちにトムスが「モラル・エコノミー」と呼ぶようになる経済的な社会関係が挙げられる。モラル・エコノミーは、身分や村落、都市の共同体内部の慣習に規定された経済関係であり、財産や土地の共同体的所有と温情主義の上に成り立っている。このような関係は、徒弟制度など慣習的社会関係とともに維持されてきた。モラル・エコノミーによって成り立つ社会においては、権力者であれ商品や賃金の値段を伝統で規定されたものから変更する

¹² Thompson, E. P., 1966, *The Making of English Working Class*, New York: Vintage, p.9 (=2004, 市橋秀夫・芳賀健一訳, 『イングランド労働者階級の形成』青土社, 11頁). (以下、TMEWC, p, 頁.)

ことや、共同体の承認を得ずに売却することは認められていなかった。そのため農民や徒弟などは伝統的な社会関係の中で一定の保護を得ることができていた。トムスンの分析は、自由主義の台頭がモラル・エコノミーを破壊し、社会秩序を再編したことを示している。そしてメイヒューなどの社会調査を基にして、不熟練労働者の流入や徒弟制の廃止といった事実を基に農民や職人たちが温情主義の終焉に伴って、農業労働者やプロレタリア労働者として地主や資本家へと従属させられていった過程を明らかにした。

2-1. 労働者階級の経験と平均化

また、トムスンは「労働者階級」という言葉で「無思慮な平均化」を行う社会学的なアプローチに対して警告を発している。「労働者」の中には、労働貴族的な職人もいれば、小規模親方、ジャーニーマン、徒弟、工場労働者、農業労働者といった人々から港湾労働者のような不熟練労働者などの下層階級まで様々な人々が存在している。これら多種多様な労働者達は、各々の経験に応じた異なった経済状況や政治的な立場に置かれており、それぞれ独自の社会的形態や通念を持っていた。「労働者階級」という言葉はこれらの人々をすべて均質的なものへと変換してしまうとトムスンは指摘している。初めから「労働者階級」というカテゴリを通して分析することで、これらの多様な集団が持つ経験が希釈されてしまい、彼らの歩んだ歴史も捨象されてしまう。

また、トムスンは「統計的な平均と人間経験が相反する方向へ展開することは十分ありえる」¹³と主張し、統計的研究を批判しながら、平均化における事実の希釈を防ぐために史料からそれぞれの集団の経験を復元する必要を説く。たとえ「平均的な」労働者の生活が向上したことが統計史料などから導き出されたとしても、その中に存在する労働貴族的職人とプロレタリアは、それぞれ全く異なった経験をしている。一般化され平均化された労働者の分析は、内包される労働諸階級をそれぞれ分析した場合とは全く異なったものとなるだろう。このような問題意識のもとでトムスンが本書の中で復元したものは、職人の持つ高度な文

化や、地主に共有地を奪われ、流動化する農業労働者の苦境であった。

トムスンは、数的なデータを基に平均的な労働者像を描き出して技術革新が社会の構造を変えたと論ずるアシュトンら経験主義者たちを「楽観的」で「全体的な流れが見え」ていないとして痛烈に批判する。アシュトンは技術革新によって社会の物質的な豊かさが実現され、結果的に労働者の生活も向上したと数字を提示しながら論じているが、トムスンは、労働者社会内部の調査史料を利用して、物質的な豊かさの向上以上に社会関係の変化によって労働者の生活が困窮したことを指摘した。アシュトンらは経済成長率などの数字に注目することで、囲い込みを「急速に成長する人口に食料を提供することに成功したもの」¹⁴として描き出し、産業革命期を進歩の時代として捉えた。しかしながらトムスンは、労働者たちの個別の事例を明らかにした史料を用いて、児童労働や長時間労働といった絶え間な労働者への搾取の強化や、職人層の没落を明らかにした。そこに見えるものは、経験主義者たちの「楽観的」な見解とは真っ向から対立する「破局的」な様態であった。

2-2. 労働者階級と「階級意識」の形成

トムスンは『イングランド労働者階級の形成』の序文で「労働者階級は太陽のようにある決まった時刻に現われ出てきたのではない。労働者階級は自らの形成に参加したのである」¹⁵と述べ、労働者階級とは外部から規定されるあるカテゴリや構造を指すのではなく、労働者階級に所属する人々自らの社会関係によって形成されるものであると論じている。「労働者階級」という言葉の中には、様々な職種の集団やその内部の序列が存在しており、これらの人々を結びつける社会関係こそが「階級」を形成していくのである。

すでに述べた通り、「労働者階級」としての意識を獲得していく労働諸集団の人々は、地主や資本家などとの間の生産関係の変化やそれによる没落を経験していた。そして、本書でも取り上げられているメイヒューなどのインタビュー調査からも分かる通り、没落しつつある労働者たちは、問題

¹³ TMEWC, p.212, 246 頁.

¹⁴ TMEWC, p.207, 228 頁.

¹⁵ TMEWC, p.9, 11 頁.

が社会関係の変化にあることを理解していた。トムソンは、こういった意識が農村における「黒人」の反乱やラダイト運動を引き起こしたと述べる。ラダイトでは、機械の導入が始まる以前から自由主義が慣習を破壊し、旧来の生産関係が変化したことによって労働者のプロレタリア化が進行していたことが理解されていた。事実、打ち壊しは職人たちが共有してきた旧来の慣習をないがしろにする資本家の工場のみが対象とされていた。そのためラダイト運動は機械の導入に反対するものではなく、生産関係の変化に対する反対運動であったとトムソンは主張する。トムソンの研究は、このような運動の発生や、その後の労働者階級意識の形成が、労働者たちによる主体的な行動によって起こされたものであり、労働者階級というものが決して外部から規定され形成されたものではないということを示している。

階級は、人間関係によって形成されるがために、それを固定することは不可能であり、それを規定する法則を設定することもまたできない。階級を「モノ」と捉えてそこに何らかの法則なり構造なりを規定してしまう分析方法をトムソンは、最初から想定されている物語にそぐわない事実を捨象してしまう手法であるとして本書の中で度々批判している。そしてそのような分析が一般化してしまうと階級概念それ自体が「軽蔑すべき空虚な作りもの」と考えられ、階級の発生すらも否定されることになると警鐘を鳴らしている。

本書はイングランドにおける「階級意識」の形成を最終的に明らかにすることを目的としている。そしてそこに至るまでに、「自由の身に生まれたイングランド人」という思想、友愛組合や労働組合による組織化、メソジストによる陶冶、フランス革命、囲い込み、救貧法改正といった政治的な変化とそれに伴う非熟練労働者の大量流入と職人文化やモラル・エコノミーの変容と破壊があり、ラダイト運動に対する政府による弾圧やピータールーの虐殺を通してそれまで様々な立場にあった人々の間に「労働者階級」としての共通した意識が芽生えるようになっていった。その意識は、土地を追われ都市工業労働者となった元農業労働者や非熟練労働者によって仕事を追われた熟練職人など様々な階層の意識を統合していったものであ

った。そして1832年の第一次選挙法改正により中産階級に対して選挙権が与えられると、選挙権を与えられず法的な立場の差異が明確なものとなった労働者階級の間には「階級意識」が自覚されるようになった。選挙権を得た中産階級は「弾圧的で反平等主義的」なイデオロギーを持つようになっていき¹⁶、労働者階級は上記の様々な要因を通して自らを形成していった。そしてここで生まれたのが労働者階級の階級意識であった。G. S. ジョーンズは、この頃に形成された中産階級とは差別化された労働者階級としての階級意識が選挙権を求める運動へつながり、チャーチスト運動を形成していったとしている¹⁷。

3. トルコにおける労働社会史研究

Y. D. チェティンカヤによると、トルコにおける労働社会史研究においてトムソンの影響が認められるようになるのは90年代以降である。本書が刊行された当初、トルコにおける歴史学は主に歴史的な有名人、政治家、スルタンや宮廷の有力者などの研究が中心であり、社会史や労働史の研究にはあまり重点が置かれていなかった。1960年代から1970年代にかけて左派の運動が活発化するとともに社会史研究が注目されるが、イデオロギーに囚われたものや、経済構造や人口動態にのみ注目した社会史研究が中心で、トムソンが注目していた労働社会の実証的研究が注目されることはなかった¹⁸。

トルコにおける初期労働社会史研究の代表的なものとしてO. センジェルの『トルコの労働者階級：その誕生と構造』¹⁹を上げることができる。センジェルは、オスマン帝国における労働者階級の階級意識の形成を、主に労働争議に関す

¹⁶ TMEWC, pp.807-808, 968-969 頁。

¹⁷ Jones, Gareth Stedman, 1984, *Languages of Class: Studies in English Working Class History 1832-1982*, Cambridge: Cambridge University Press. (=2010, 長谷川貴彦訳, 『階級という言葉、イングランド労働者階級の政治社会史 1832-1982』刀水書房。) (以下LC.)

¹⁸ Y. Doğan Çetinkaya, 2015, “Selafetten İhyaya” : Türkiye işçi sınıfı tarihi ve E. P. Thompson” in Y. Çetinkaya, Y. Doğan and Mehmet Ö. Alkan eds., *Türkiye İşçi Sınıfı Tarihi 1893-2014*, İstanbul: Tarih Vakıf Yurt Yayınları: pp.1-28.

¹⁹ Sencer [Baydar], Oya, 1969, *Türkiye’de İşçi Sınıfı: Doğuşu ve Yapısı*, İstanbul: Habora Kitabevi.

る新聞資料を利用しながら分析した。オスマン帝国における工業化は、国家とそれと結びついたフランスなどの外国資本によって進められたため、オスマン帝国末期の労働運動や労働者階級意識は「外国資本／国内労働者」という二項対立の中で形成され、「資本家／労働者」という対立を持った西洋のそれとは異なる文脈の対立軸持っていたとセンジェルは主張する。

センジェルの社会分析には大きく分けて二つの問題があると言えるだろう。一つ目は、タンジマート改革以降の労働者階級と階級意識の形成を主に新聞資料に依拠しながら分析を行ったために、宗教的、民族的、階級的に複層的な構造を持つイスタンブールの「労働者階級」をそれぞれの差異を捨象した「コスモポリタンの労働者階級」という画一的な存在としか捉えられていないこと。二つ目は、タンジマート期から帝国崩壊に至るまでに各地で発生した労働争議とその後の組織化の過程についての個別事例を検証しないために、これらを唐突に発生する現象のレベルでしか捉えきれていないことである。これは、用いた史料が主に新聞であり、それぞれの職場や労働組織の内部構造や労働争議に至るまでの過程を明らかにする内部史料や裁判史料を用いなかったことに起因すると考えられる。いわゆる「下からの歴史」を書くにあたって、史料の残存状況という大きな足かせが存在することもまた事実であるだろう。同様の問題を抱えていると言われるイギリスにおいて、教会史料や当時の流行歌までも利用しながら都市や農村²⁰における社会関係の分析をトムスンが行った。オスマン帝国の史料は、手記のようなものはほとんど残されていない一方で、特に18世紀以降のものであれば非常に多くの行政文書や法廷台帳などが残されている。これらの史料の多くは政府などの権力者によって残されたものであるが、同職組合の調査報告などから社会の人々の生活をうかがい知ることは可能である。

90年代以降の労働社会史の研究は、これらの史料を用いて特定の農村や炭鉱、同業組合の構造を

²⁰ 農村社会の分析は本書第2部第7章「農場労働者」で中心的に述べられているが、トムスンの他の著書 *Customs in Common* や Thompson, E. P., 1975, *Whigs and Hunters: The Origin of The Black Acts*, New York: Pantheon Books においてより詳しい検証がなされる。

実証的に分析するものが中心となっていた。カータートのテッサロニキにおける港湾労働者を中心とした労働社会の研究²¹や、E. カフヴェジのゾングルダクの炭鉱労働者の内部構造に光を当てた研究²²は、労働者階級の複層性を認め、従来のイデオロギーに規定された労働者像を転回するものであったと言えるだろう。例えば、カータートの研究は、テッサロニキに存在していた港湾労働者のギルドが主にユダヤ人によって担われていたことを明らかにし、それぞれの職業集団が民族や宗教に基づいて、ある程度の排他性を持っていた可能性を示している。これらの研究は、統一的な「労働者階級」像ではなく、地域や職業集団などの分節的な構造を明らかにし、様々な特色を持つ集団がオスマン帝国の労働者階級の中にも存在したことを明らかにしたと言えるだろう。しかしながらこの時代の研究も、トムスンが職人集団などの分析から導き出したそれぞれの集団の身分内秩序や、階級的な序列とそれに規定された社会的な関係の解明までは至らなかった。

近年では、これらの研究を基にして、それぞれの社会集団の経験に即して形成される集団内秩序や内外の社会関係に注目した研究が行われるようになり、前近代の騒擾事件の再評価などが行われ、トルコの労働社会史研究は大きな発展を遂げつつある。このような研究を通してオスマン帝国後期から形成されてきた都市下層社会の歴史の解明が進んでおり、都市研究の分野にも影響が与えられることが期待される。

トムスンの影響が見られる代表的な研究として、E. アラバジュの1860年代にブルサで発生した騒擾を取り扱ったものがある²³。アラバジュはこの

²¹ Quataert, Donald, 1995, "The Workers of Salonica 1853-1912" in Quataert, Donald and Erik J. Zürcher eds., *Workers and The Working Class in The Ottoman Empire and The Turkish Republic 1839-1950*, London: Tarius Academic Studies, pp.59-94.

²² Kahveci, Erol, 1996, "The Miners of Zonguldak" in Kahveci, Erol, Nadir Sugur and Theo Nichols eds., *Work and Occupation in Modern Turkey*, New York: Mansell Publishing Limited: pp.173-200.

²³ Arabacı, Elçin, 2015, "Kapitalizmin Victoria Çağında Bursa'da Hukuksuzluk, Mülksüzleştirme ve Bir Şehir Ayaklanması" in Y. Çetinkaya, Y. Doğan and Mehmet Ö. Alkan eds., *op. cit.*, pp.56-119. 1862年にブルサで外国資本に経営された工場が民衆によって襲撃され放火された。

騒擾が、民族や宗教の対立によって起きたのではなく、工場制によって仕事を奪われたギルドの職人たちによって起こされた騒擾でもない」と主張し、多角的な史料の検討を通してタンジマート期の都市社会における社会関係の変化が引き起こしたものであると断じた。タンジマート期に外国人資本家や在地の有力商人からなるブルジョワ階層が形成され、土地やワクフ財の個人的な収容による富の蓄積と、職人などのプロレタリア化が発生したこと、都市の水源や墓地といった共有地が工場により汚染、破壊または接収されたことなどがブルサ住民による工場への襲撃を引き起こしたとアラバジュは分析し、オスマン帝国における産業革命期の社会構造の変化を示す例としてブルサにおける騒擾を位置付けている。この事件は旧来の秩序の中に生きてきた都市の住民と新たな論理をもとに形成された新ブルジョワ層との社会関係の変化による対立として理解されることができよう。アラバジュはこの騒擾を宗教対立ではなかったとして、この事件における宗教の役割に着目していないものの、旧来の秩序がどのようなものであったかを考えるとき、その中で宗教の役割にも目を配る必要があるだろう。また、この事例における新興ブルジョワ階層が旧来の支配層ではなく、外国人資本家と在地の商人などによっても構成されていたことを考えると、センジェルの主張した「国家と外国人資本家/労働者」という対立軸は過度な単純化に陥っていると言えるだろう。

加えて、オスマン帝国における労働社会史の大きな論点として、「民族・宗教による分業」を挙げることができる。センジェルはこの時代の労働者階級が民族や宗教の違いを超えて「労働者」としての利害を一致させた「コスモポリタンの」性格を持っていたと主張し、それぞれの集団の内外における社会関係の分析には踏み込まなかった。その後のトルコの労働社会史研究では、産業や工場

内部の部門ごとに民族や宗教によって規定される分業が行われていたと考えられるようになる。このような変化の背後には、国内のトルコ・ナショナリズムの高まりや国外研究者からのオスマン帝国に対するオリエンタリズム的視線の影響が存在したとされる²⁴。確かにオスマン帝国には、領内にトルコ人を始めとして、クルド人、アラブ人、アルメニア人、ギリシャ人など様々な民族が内包されており、宗教も大きく分けてイスラーム教、キリスト教、ユダヤ教が存在していた。実際にカーターが示したテッサロニキのユダヤ人陸仲仕ギルドの例もあり、民族的排他性を持つ集団が存在していたことは知られている。しかしながら、以上のようなオスマン帝国における宗教、民族による分業という言説は政治的なバイアスを少なからず含んでおり、必ずしもこの枠組みだけで現実を捉えることはできない²⁵。

M. E. カバダユは、現在も金角湾のそばに建物が残るフェズ帽工場(Feshane)の給与台帳を基に、工場で働く労働者の分節構造を明らかにし、工場における分業が必ずしも民族・宗教による分業の元に成り立っていないことを示した。カバダユは、台帳の分析の中で、フェズ帽工場における分業体制が民族や宗教よりも出身地によって規定されることの方が多かったと指摘している。オスマン帝国領内の様々な地域から人が集まる都市であったイスタンブルには、地方から移住してきた人々の地縁的な集団が形成されており、カバダユは、イスタンブルの中に形成されていた地縁的つながりは、宗教や民族の繋がりよりも優先されていたと主張している。しかし、フェズ帽工場は半軍需工場であったために、キリスト教徒の雇用者数が少ないことや、ムスリム以外が管理職につくことができなかったことも台帳の名簿から明らかになっており、宗教に応じたある程度の差別が存在して

この事件は参加者の中にイマームなどがいたことや、工場制の始まりに当たる時期に発生したために宗教的な対立や、旧来の職人集団と工場制の対立という文脈で解釈されていた。アラバジュは、当時のフランスやイギリスの副領事の手紙や裁判史料を利用してこの騒擾が発生した原因が、タンジマート改革による新興ブルジョワ階層の登場や共有地の私有化といった都市における制度と社会関係の変化と在地のしきたりとの対立にあったと主張する。

²⁴ Atabaki, Touraj and Gavin D. Brockett, 2009, "Ottoman and Republican Turkish Labour History: An Introduction" in Atabaki, Touraj and Gavin D. Brockett eds., *Ottoman and Republican Turkish Labour History*, London: Cambridge University Press, pp.1-17.

²⁵ Kabadayı, Mustafa Erdem, 2009, "Working in a Fez Factory in Istanbul in the Late Nineteenth Century: Division of Labour and Networks of Migration Formed along Ethno-Religious Lines" in Atabaki, Touraj and Gavin D. Brockett eds., *op. cit.*, pp.69-90.

いたことを指摘している。カバダユの研究は、「コスモポリタンの」という言葉では捉え切ることのできない階層性が宗教などの違いにより存在していたことを明らかにすると同時に、「民族・宗教による分業」だけでは捉えきれない「出身地に規定された分業体制」が存在していたことを示している。

すでに述べたように、トムスンの影響がトルコで認められるようになった90年代以降、トルコの労働社会研究においても労働者諸集団の形成と各集団間の社会関係の実証的な解明が行われるようになった。かつては「労働者階級」として画一的に考えられていた人々の中に複層性が存在することが認識され、現在では各同業組合や工場を単位とした社会関係の分析が行われている。それと同時に資本家側にもまた「外国資本」だけでなく、在地の新興ブルジョワ層や国営工場といった集団が複雑に関わりあう、複層的な社会構造が存在していたことが明らかになってきている。これらの研究は法廷台帳などの外部の史料を用いながらも、トムスンの分析視角を取り入れることにより、社会関係に注目してそれぞれの集団のもつ内部構造を復元することを試みている。しかしながらトムスンが明らかにした「労働者階級意識の形成」の過程をどのようにしてこれらトルコの各労働者諸階層が歩んでいくか、という点に関しては未だに解明され尽くしているとは言い難い。19世紀の後半から確認される諸労働者のストライキや組織化が、単純に社会主義思想の伝来によって形成されたという認識にとどまるのではなく、トムスンが示したように、在地の宗教者や旧来の職人文化が階級意識の形成に与えた影響をトルコの歴史的文脈に即してさらに検証する必要がある。

トムスンが利用していた労働者の手記やメイヒューのような社会調査の報告といった史料はオスマン帝国にはあまり見られない。19世紀のトルコの労働社会史の研究では、シャリーア法廷台帳が利用されることが多い。法廷台帳は、遺産の相続記録や各種ギルドの内部調査や物品などの売買記録、賃借記録などを残しているため、これを利用することで具体的な街区や、ギルドの成員や経済関係などの内情を復元することができる。S. ファローキーによる前近代ギルド研究などは、法廷台

帳を中心的に利用しながらギルドと政府権力の関わりや19世紀における内部構造の変化を分析した²⁶。イスタンブルの法廷台帳史料は、16～18世紀のものを中心に一部刊行されているものもあり、特定のギルドや地区に注目してこの史料を分析することで前近代における通史的な分析を行うことができるだろう。刊行されていない台帳も、イスタンブルのものはイスタンブール・ムフティー局付属文書館に所蔵されており、デジタル化された史料をイスラーム研究センターの図書館などで閲覧できる。法廷台帳以外にも、前述のカバダユの利用した工場の給与台帳など多くの史料が首相府オスマン文書館に所蔵されている。

4. ゲジェコンドゥ研究と労働

イスタンブルの発展と移民は切っても切れない縁で結ばれていた。ここまで見てきた先行研究が示している通り、イスタンブルには前近代から移民が流入し続けており、現代においても国内外から新たな移民が流入してきている。そのためカルパットら研究は、農村からの移民の動向を中心とするものであった。その上で、カルパットはゲジェコンドゥを、移民を都市生活へ順応させる機能を持つ空間として捉える。このような言説は、E. ホールや H. ガンスなどの理論をもとにして構築されたと考えられるが、その後のゲジェコンドゥの歴史において、ゲジェコンドゥ住民が必ずしも都市生活に包摂されていかなかったことは明らかである。確かにゲジェコンドゥ住民を数字の上で平均化させて観察した場合、多くのものは経済状況を改善させて、都市的な生活へと包摂されていたと言えるだろう。しかしながら、後述するスルクレのように現代の都市社会へ完全に統合されることなく残った地区も存在している。これらの都市へ包摂されないゲジェコンドゥ住民たちを分析するためには、現地に存在する社会関係の復元が必要不可欠であるだろう。そのためには、移住だけではなく移住後に彼らが従事する労働のあり方にも注目することが必要であると考えられる。カルパットもまた、農村からの季節労働者が、ゲジェコンドゥを形成していく上で大きな役割を果

²⁶ Faroqhi, Suraiya, 2009, *Artisans of Empire: Crafts and Craftspeople under the Ottomans*, New York: I.B.Tauris.

たしたと述べているものの、具体的に従事した職業や都市社会の中での季節労働者たちの立ち位置などには言及しきれてはいない。しかし移民たちが従事した具体的な労働、職場における社会関係、そして職場とゲジェコンドゥの関わりといったことを明らかにすることは、各ゲジェコンドゥの独自性を際立たせるために重要な要素となる。

実際に、ゲジェコンドゥの住人は地縁的、血縁的なつながりを頼りに地方から大都市に移住して集住したことに加え、地方から流入した人々の多くは荷物運びや行商、建設業などの不熟練労働に従事したことがシェンヤブルなどの研究で指摘されている²⁷。同様の移住と労働の形態が前近代のカサプ・イリヤス地区へのベハールの研究で指摘されており、住民の多くは地縁を頼ってアナトリア半島南東部に位置するアラプキルとその周辺の地域から移住してきたこと、新入りの移住者は果物売りなどのギルドの下層に包摂されていたことが明らかにされている。ベハールはこの分析の上で、オスマン帝国後期の人口流入と都市への集積による街区の発展は、「ゲジェコンドゥの遠い親戚」として理解できると述べる²⁸。現代のゲジェコンドゥの実態とオスマン帝国時代における街区の実態は、街区を取り巻く社会状況に大きな隔たりがあるため一括して語ることは必ずしもできない。しかしながら、都市への人口の流入と堆積、そして都市下層労働市場への包摂といった現在のゲジェコンドゥにおいても確認される事象の源流を、ある程度はオスマン帝国時代の都市へ求めることは可能であるだろう。

これらの人の流れやそれによって生じた問題は、各街区の住民登録局に所蔵されている記録を追うことで検証することができる。住民登録局には、オスマン帝国時代の人口調査台帳なども所蔵されており、ベハールの研究はこの台帳をもとに行われた。また、首相府オスマン文書館にも 60 年代から 70 年代にかけてのゲジェコンドゥにおける衛生問題などの報告書類が所蔵されている。このほかに現在に至るまで自治体や民間団体、研究者によりゲジェコンドゥの住民に対するインタビューや生活調査が行われてきた。これら過去の調査を

体系的に今一度分析し直すことで、当時の調査書やインタビューなどの史料的价值を見直すことも重要であるだろう。

4-1. ゲジェコンドゥの独自性

ゲジェコンドゥの特殊性に着目をしている研究として、いくつかのジェントリフィケーション研究の例が挙げられる。ここではスルクレ、バシュビュユク、タルラバシという 3 つのゲジェコンドゥを取り上げる。スルクレはイスタンブル旧市街のもっとも外側に位置したロマ系の住民が古くから住む地区である。2000 年代に再開発計画が着手され大きな反対運動を呼んだことで注目を集めた。大きな特徴として、多くの住民が正式な土地の所有権を保持していたことがあげられる²⁹。対してアジア側のマルマラ海沿岸に位置するバシュビュユクは 1980 年代に形成されたゲジェコンドゥで、住民はほぼトルコ人によって構成されていたものの正式な土地の所有権を有していなかった。いずれの地区も再開発の対象となり反対運動を生んだが³⁰、土地の所有形態の違いのために立ち退きの際する行政の保障や対応に大きな違いが見られた。また、住民交換のためにキリスト教徒の家主が去り、地方からの移住者達により占拠されたタルラバシと呼ばれる地区では、正式に所有されている住宅、不法占拠されている住宅、借家など様々な形態で土地が所有されていた。行政はタルラバシの再開発の際に正式に土地を所有している住民とのみ交渉をすることで反対運動の分断をはかった³¹。

これらの研究では主に、住民による土地の所有形態とその後の反対運動への影響に重点を置きながら分析が行われている。土地の所有形態は、ゲジェコンドゥの社会構造を分節化する際の一つの

²⁹ Foggo, Hacer, 2007, “The Sulukule Affair: Roma against Exproitation” *Roma Rights Quarterly*, no.4: pp.41-47.

³⁰ Kuyucu, Tuna and Özlem Ünsal, 2010, “‘Urban Transformation’ as State-led property Transfer: An Analysis of Two Cases of Urban Renewal in Istanbul”, *Urban Studies*, vol.47 no.7: pp.1479-1499.

³¹ Islam, Tolga, and Bahar Sakızlıoğlu. 2015, “The making of, and resistance to, state-led gentrification in Istanbul, Turkey” in Lees, Loretta, Hyun Bang Shin and Ernesto Lopez-Morales eds, *Grobal Gentrification*, Bristol: Policy Press, pp.245-254.

²⁷ BG, p.118.

²⁸ ANOI, p.120.

指標となるだろう。しかしながら、これだけではゲジェコンドゥ内部における社会構造を明らかにするには不十分である。それぞれのゲジェコンドゥ内における労働を媒介とした社会関係をもう一つの基軸としてみていくことで、土地の所有形態と併せてより広がりのある複層的な社会関係の復元が可能となるだろう。例えば地主と借家人の関係とゲジェコンドゥ内部における労働の労使関係がどのような関わりを持つのか、といったことを明らかにしていくことで、労働関係を通じた社会構造を垣間見ることができる。そのためには、オスマン帝国からトルコ共和国に続くトルコの労働社会史研究の蓄積を取り入れていく必要があるだろう。都市社会史を労働社会史の観点から捉え直すことにより、トルコの大都市の発展が工業化以降遂げてきた道筋を見いだすことができるはずである。ゲジェコンドゥと労働社会との関わりを明らかにする上で、トムスの用いた手法と問題意識は非常に重要な示唆を与えるだろう。

おわりに

ゲジェコンドゥは、長らくトルコの都市が抱える都市問題の一つの形態として認識されてきた。実際、ゲジェコンドゥには衛生問題や公害、インフラの不整備、人口の密集など都市問題としてみなされる様々な問題を抱えてきた。それゆえに政府はゲジェコンドゥを優先的に解決すべき問題として認識し、今日に到るまで様々な対応策を打ち出してきた。ゲジェコンドゥが社会的に大きな問題であると認識された70年代に、カルパットなどは他の第三世界の国々に存在するスラムとの比較の中でゲジェコンドゥを世界的なスラムの拡大の文脈の中で位置付けようと試みた。それ以来、他の多くの研究者も大局的な視線からゲジェコンドゥを捉えようとしてきたように思われる。しかしながら、ここまで検証してきた通り、ゲジェコンドゥはそれぞれが独自の歴史を持つものであり、それぞれのゲジェコンドゥが抱える問題もその歴史を反映したものである。目前に表出する問題を理解するためには、その問題の裏に存在する歴史を、労働関係、土地の所有形態、地縁的關係宗教や民族といった要因を考慮に入れて検証する必要がある。これらの要素がその時々の政治や経済の

情勢と様々に絡み合いながら、それぞれの独自の社会構造を作り出しているのである。問題はこの社会構造の中で発生しており、同時に住民の意識や社会的な立場とも相互に影響を与えている。ゲジェコンドゥの歩んだ道が決して「現象」という受動的な言葉や「空間構造」という入れ物としての把握だけでは捉えきれないものであることが理解される必要があるだろう。いわばゲジェコンドゥもまた「自らの形成に参加した」のである。

ゲジェコンドゥの主体的な形成過程を明らかにする上で、「労働」というキーワードを中心に据えながら様々な資料を利用して、ゲジェコンドゥの内部構造へアプローチする手法は非常に有効であるはずである。しかし、現代の研究において資料となりうるものの量は膨大であり、史料の残存状況により大きな制約の課される前近代とは研究における状況は大きく異なる。現代を扱う場合、その大量の資料の中から何を選び出し、いかに使うか、といったことが問題となるだろう。また、個人情報保護といった制限により解明が難しいものもある。特にゲジェコンドゥのような正規の住宅市場から外れた、ある意味でのアウトロー世界との繋がりを持つ分野の研究となると、アウトロー世界との関係を考慮に入れながら研究を行う必要に迫られることもある。ゲジェコンドゥの研究が近年に至っても非常に表層的な部分しか取り扱えない理由の一つとして、このような状況が存在していたことを見逃してはいけない。しかしながら、近年ゲジェコンドゥを取り巻く状況は急速に変わりつつある。現政権与党の公正発展党の登場以降、権限を強化された住宅開発局による再開発事業により多くのゲジェコンドゥが凄まじい早さで姿を消しつつある。このような状況にある現在にこそ、ゲジェコンドゥとはなんであったのかを丁寧に一つ一つ明らかにしていく必要がある。この作業を通じて、ゲジェコンドゥの独自性が明らかになる一方で、都市住民の目線からトルコの現代社会を見直し、現代政治と都市の関わりを住民の視点から検証していくことができるはずである。